

紀要

■設立40周年記念号

- 【小特集】東近江市相谷熊原遺跡をめぐって—縄文時代草創期の遺構と遺物**
- 「矢柄研磨器」雑考 —相谷熊原遺跡を理解するために— ……松室 孝樹(1)
- 鈴鹿山中の遺跡にみる選地の原理 —相谷熊原遺跡の理解に向けて— ……重田 勉(9)
- 土偶の機能・用途に関する理解の移ろい ……瀬口 眞司(15)
- * * *
- 高島市今津町弘川B遺跡出土の縄文土器(2) ……小島 孝修(28)
- 草津市志那湖底遺跡出土岩田第4類土器群の様相 ……小竹森直子(42)
- 近江・湖東北部の埴輪 ……辻川 哲朗(48)
- 製鉄炉の設置方法について —源内峠遺跡1号製鉄炉の検討— ……大道 和人(73)
- 古代建築物構造ノート —掘立柱の再考— ……横田 洋三(81)
- 塩津起請文札と勧請された神仏 ……濱 修(86)
- 三重県桑名市西方廃寺出土の飛雲文軒瓦について
—桑名市博物館所蔵品より— ……中西 常雄(92)
- 観音正寺と観音寺城跡(2) ……伊庭 功(95)
- 遺跡出土の化粧道具に関する覚書 —夏見城遺跡出土の毛抜きから— ……堀 真人(103)
- 将棋史研究ノート(5) 金将の役割 —金将の動きと配置から— ……三宅 弘(116)
- 「忍者」研究の現状と課題 ……阿刀 弘史(120)
- 文化遺産としての琵琶湖
—「水」を介した人類と自然の永続的共生を示す資産群— ……大沼 芳幸(124)
- 平成22年度滋賀県埋蔵文化財センター考古学体験学習を終えて ……具志堅有紀(142)
- 保存処理30年の記録 ……中川 正人(148)

24

紀 要

第 24 号

—設立40周年記念号—

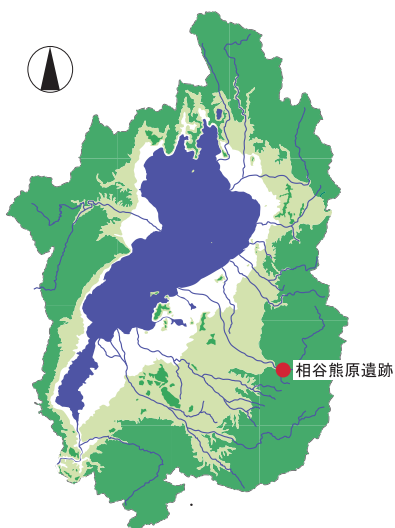
2011.3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

縄文時代草創期の 遺構と遺物

— 東近江市相谷熊原遺跡 —

写真：滋賀県教育委員会提供



■土偶が出土した竪穴建物跡
相谷熊原遺跡は、愛知川上流の段丘上にひろがる縄文遺跡である。縄文時代晩期の墓地のほか、縄文時代草創期の住居（竪穴建物跡）が検出された。（重田論文参照）



■矢柄研磨器
今回検出された5棟の竪穴建物跡から溝をもつ砥石が出土した。その形状から矢を成形するさいに使用されたものと考えられているが、縄文時代草創期に限定される石器であり、その機能には謎が多い。（松室論文参照）



■出土した土偶
ふくよかな体に豊満な乳房を表現した土偶である。縄文時代草創期に位置づけられるもので、日本最古級の一例となった。高さ3.2 cmの小型品で、手足の表現がなく、上半身のみを表現する。（瀬口論文参照）

【小特集 東近江市相谷熊原遺跡をめぐって（3）】

土偶の機能・用途に関する理解の移ろい

瀬口眞司

1. 本稿の目的

本稿の意義は、2010年末段階の土偶研究史を概観する点にあるが、遺漏がまだ多いこと、理解が表層的な部分にまだ留まっていることなどが問題点として残る。これらの問題点は、いましばらく時間をかけながら補っていく必要があるけれど、それには作業の原点も必要である。そこで、ここでは本稿をその原点として位置付け、あえて現状における概観の成果を提示してみたい。

さて、当財団は2010年に設立40周年を迎えた。この記念すべき年に、当財団は学史に残るであろう重要遺跡を調査した。東近江市永源寺の相谷熊原遺跡である。現地調査を担当した調査員の奮闘の結果、13,000年前の縄文時代草創期に設けられた5棟の住居群を検出し、その1棟から日本最古級の土偶を発掘することができた（財団法人滋賀県文化財保護協会2010、松室・重田2010ほか）。

発見された土偶は、三重県粥見井尻遺跡出土例と並んで日本最古級のものと位置付けられている。日本列島における「土偶」の原型の一つに数えることができるだろう。後氷期への移行期における琵琶湖周辺地域の先進性を示唆する重要遺物と位置付けられていくかも知れない。

ともあれ、豊かな乳房を丁寧に表現したその造形は美しく、草創期の縄文人の表現力の高さを見せつけてくれる。にもかかわらず、この土偶には手足が表現されていない。また極めて興味深いことに顔もなく、その代わりに首の部分に小さな孔が空いている。造形の完成度の高さを踏まえれば、これらの「ない」という諸特徴（顔・頭など）と、「ある」という諸特徴（乳房など）にはそれぞれ何らかの意味があると考えべきだろう。これらの造形は何を示しているのか。どのような世界観がこの土偶に隠されているのだろうか。そもそも「土偶」とは何なのだろう。

この問いに答えるには二つの作業が必要である。第一は今回の新発見資料を含めたこれまでの出土土偶の分析であり、第二は我が国における土偶研究史を振り返っておくことだが、ここでは第二の作業を進め、今後の参考にすべき意見や、克服すべき課題などを明らかにすべく、冒頭に挙げたような考え方にに基づきながら土偶研究史を振り返り、特に土偶の機能・用途に関する理解の移ろいについて整理してみたい。

2. 研究史の概観

周知のとおり、土偶は日本考古学の初期から着目されたこともあって、その研究史は膨大なものになる。その全てに目を通すことは甚だ難しい。しかし幸いなことに、後藤

和民・小野美代子・米田耕之助・奥山和久・藤沼邦彦・植木弘・原田昌幸をはじめとする諸氏が詳細に整理してくれているので（後藤1964A・B・C、小野1984・1999、米田1984、奥山1990、藤沼1997、植木1999、原田2010A・B）、これらの助けを得ながら現状で可能な範囲の努力を本稿では試みたい。

考古学者のみならず、一般国民の間でも、土偶はなじみのある遺物の一つだが、その本質の解明にはかなり苦心している。例えば、雑誌『季刊考古学第30号（特集 縄文土偶の世界）』の中で、奥山和久は「土偶の本質に迫るべくさまざまなアプローチが行なわれてきた」が、「土偶製作が縄文人の心の世界に起因するものだけに、それが『どんな使いみちがあって、どんな働きをしたのか』についての問題は、依然としてブラックボックスの中にある」と研究の困難さを述べているが（奥山1990）、同様な見解は多くの考古学者も述べてきたところである（小野美代子1984・米田1984ほか）。

このような土偶に対する私たちの認識を深めるための第一歩として、本稿ではまず研究史を概観したい。概観に際しては、（1）江戸期、（2）明治・大正期、（3）昭和前期、（4）昭和後期、（5）平成期と仮に区分し、最後に（6）として西日本の研究状況を記載する。なお便宜上、上記の区分を越えて記載することがある。また、昭和の前期と後期の境界は、日本が大開発時代に突入した1960年代に設けて記載を進めたい。各文献は表1に年代順にまとめた。

（1）江戸期の研究

土偶が記録の対象になったのは、江戸時代に遡る。最古の記録例は、元和9年（1623年）に津軽藩で編纂された『永禄日記』の記載である。土偶に対する関心が高まったのは、考証学や博物学が興隆し始めた江戸時代後期である。寛政12年（1800年）に秦樟丸がまとめた『蝦夷島奇観』には、北海道当別（現在の函館周辺）で発見された土偶が初めて図画として描かれた（秦1800）。最古の「土偶」という名称は、文化・文政年間（1800年代前半）に編まれた『耽奇漫録』にあり、そこでは「津軽亀ヶ岡にて掘出たる土偶人二軀」と記載されている（西原1826）。

（2）明治～大正期の研究

土偶の本格的な研究は1880年代に始まる。1886年、白井光太郎は「貝塚より出し土偶の考」（白井1886）を公表し、土偶の用途を初めて論述した。この論考の重要な点は三つ

ある。その第一は、土偶の文様から当時の服装・服飾の復元である。この論点は、1920年代にその方法の限界性が甲野勇によって指摘されるまで継承された(甲野1924)。第二は時期に関する記述で、白井は土偶の所属時期を石器時代に初めて比定した。第三は用途についての記載で、「(一)小児の玩弄物に製しか(二)神像と為し察りしか(三)装飾と為し之を帯ひしか」と推察し、このうち「携帯される装飾品」説を最も適当な仮説だと位置づけつつ、護神牌を兼ねたものと推察した。

1891年、若林勝邦は「貝塚土偶二就テ」(若林1891)の中で、既知の土偶34点を三大別し、それぞれ「(1)内部空虚で、装飾密、全形大なる土偶」、「(2)内部充実し扁平、装飾省略せられ全形小なる土偶」、「(3)顔面の部分のみのもの」に分類した。

坪井正五郎もまた、1898年に著した「貝塚土偶の男女」(坪井1898)の中で、土偶の表現に男と女の区別があると述べ、1899年には「コロボックルの宗教的遺物」の中で、土偶には「大小、中空と中実、精製土偶」が存在し、「立体的な土偶と扁平な土偶」の相違があること等について指摘している(坪井1899)。

1890年代の土偶論を牽引した一人はこの坪井小五郎だろう。坪井は当時の学会の最大関心事であった石器時代の人種論争や風俗研究の素材として土偶を扱った。坪井の研究の最大の特徴は、土偶をコロボックルの日常のありさまをもとにして作られものだと定義した点にあるだろう。従って、学会におけるコロボックル説の衰退と共に坪井の論説の多くは意義を失ったが、その後の土偶研究を決定づける重要な多くの論述も残している点は見落とせない。

最も重要な指摘事項は1895年から1896年にかけて発表した「コロボックル風俗考」(坪井1895・1896)での言説で、①巧妙精緻なものがあることから土偶は玩具ではなく「信仰上のもの」であること、②土偶の頭部や手足部がしばしば欠損していることから「恐くは一種の妄信の為、故意に破壊せるに由るならん」こと、③土偶の形には種類や変化があるけれど、その用途は表面に現れた人の形より、その内面に込められた意識の中にあることなどを指摘した。加えて翌々年、土偶と石器時代の仮面について「宗教上の意味有る物」と仮定して支障がないと主張している(坪井1898)。このように土偶を縄文時代における宗教関連遺物とする考えは、坪井とその時代が育み、決定づけていったといっていよう。

大野延太郎もまた、土偶を宗教的遺物に位置付けていった一人である。1897年、大野は「土偶と土板の関係」(大野1897)を著し、土版とは「携行品」であり、「宗教上護身用或ハ符号ノモノ」と論じ、土偶についても同様な用途を想定した。

さらに大野は、1910年に大野雲外として「土偶の形式分類に就て」(大野1910)を発表し、287点の土偶を15種類に

大別した。そして、男女別に区分した上で、女子を象ったもの大半を占めることをもって、土偶を「女神即妊婦の崇拜する、安産の守神」と推察している。1913年には、高橋健自も『考古学』の中で、土偶がいずれも奇妙な形をしていることに注目し、「想ふに宗教的信念から一種の対象として能と不可思議たる状を表したのかも知れない」と述べている(高橋1913)。

1922年、鳥居龍蔵は「日本石器時代民衆の女神信仰」(鳥居1922)の中で、男性よりも女性を象った土偶が圧倒的に多いことを踏まえながら、民族誌を援用し、「当時彼等の間に盛に女神信仰の行はれた結果、斬く多数なる女形が、土偶や他の物に表現せらるるに至ったこと」、顔面把手なども女神を表現したものであること、「乳部を甚だしく突起させ、腹部を頗る肥満せしめ、また或者には陰部さへも現はれ居るので、何物かのシンボルである」ことを想定し、ヨーロッパとの比較から、土偶が地母神信仰に基づく産物であることを推測した。

同年、八幡一郎は、「信濃諏訪郡豊平村広見発見の土偶」(八幡1922)において、「注意すべきはこの土偶が発見された際その周囲に小石が直径一尺二三寸位の円形を以て取り囲んでゐたと云ふことである。……私はこの事がすでに偶然のことにあらずして、かのストーン、ヘンチ若くはストーン、サークル等が新石器時代に於て原始宗教に重大たる関係ありしが如く只大なる石を以つて小なる石に換へた何等かの宗教的意義ある儀式か呪トの如きものに用ひたのものではあるまいか」と論じた。

(3) 昭和前期の研究

1927年、谷川磐雄は「土偶の社会学的考察」(谷川1927)のなかで、山形土偶を例示しながら、その胴部に垂下する直線文に女性の象徴性を認めた。これは、後に「正中線」や「妊娠線」と呼ぶ線の最初の指摘だとされている(原田2010A)。

その前年の1926年、谷川は「土偶に関する二・三の考察」(谷川1926)の中でまず土偶の用途について検討し、「石器時代民衆が呪物として各人或は各部落が随意に製作し、崇拜し、携帯したもの」であり、破損した状態の土偶に関しては、「石器時代民衆の靈魂観は、所謂Animismの時代であり、土偶も完全なものはよく靈力を憑らしめてmagicとして役立つが、一旦破損すればその能力を消失して、土器の破片と同一視せられ、貝塚に放棄されるに至った」と考えた。また甲野勇は、土偶自体は神像ではないこと、「精靈を宿す人間的姿態をそなえた依代として作られたもの」であることを綴っている。谷川や甲野のこれらの論考は土偶を新たに「依代」と捉えた点で注目すべきだろう。

なお、谷川の1926年の論考は方法的な変換点の一つとしてもまた注目できる。谷川は土偶の型式学的分類を試みるだけでなく、併せて土器型式との対応を試みた。小野美代

子が指摘するように、明治時代の土偶研究は、当時の日本考古学の大きな課題であった先住民族論争の影響もあり、「風俗史的土偶研究や土俗学的な土偶の解釈」に偏っていたが、大正期を経て、昭和期に至る過程で、土偶研究に型式学的手法と編年の認識を導入する流れが生まれ始めており（小野1999）、それをよく示す論考の一つといえるかもしれない。

このような流れの中、1939年、八幡一郎は「日本先史人の信仰の問題」（八幡1939）の中で、無形の世界活動を先史学が探ることの困難さを述べ、従来の民俗例を援用した推察方法に対して批判的に注意を促した。そして、従来の土偶研究法の限界と研究の停滞を指摘し、二つの新機軸を提言している。その第一は型式学的・編年学的資料操作であり、第二は遺構からの出土状況を重視する姿勢である。

このうち第一の新機軸について、八幡は「先づ土偶の型式を調査し、型式の歴史的序列と地理的分布を吟味することにより、土偶の変遷並びに文化圏との関係を極めれば、文化圏内の「他の文化要素との関係によって、該型土偶を生んだ社会的背景を知ることが可能となり、「さすれば土偶本来の姿を求めることが出来、それによって真の意義の把握が可能になる」と見通しを述べている。

その後、八幡は「日本の先史土偶」（八幡1959）で、「土偶の総合的研究は幾度か試みられたが、まだ完璧とはいわれない。このような土偶の時代様式、地方様式が追及されて、ゆるぎない体系ができるまでは、いろいろな基本的問題に深く立ち入ることはむずかしいのである」と改めて述べた。

八幡が示した必要性は、昭和期後半以降でも繰り返し指摘・実践されている。例えば高柳圭一は「東北地方に於ける縄文時代後期後半の土偶」（高柳1987）で、瘤付土器に伴う土偶を詳細に検討し、遮光器土偶の出現を検討した。また鈴木正博は「安行式土偶研究の基礎」（鈴木正博1989）を示して土器の型式学を踏まえた土偶研究の必要性を改めて強く訴え、実践した。

一方、第二の新機軸について、八幡は「遺跡内における土偶のあり方から土偶のもつ意義を明らかにしようという態度は、考古学として本筋だし、当時の生活設計の中に土偶が占める位置を見出すことが、土偶そのものの役割を知る重要な契機である」と説いている。

八幡の提言が示されて以降、出土状況に注目した論考が積み重ねられ、1954年には山崎義男が「群馬県郷原出土土偶について」（山崎1954）を公表し、同年、酒井忠純・江坂輝彌も「山形県飽海郡蔵岡村杉沢発見の大洞C2式の土偶の出土状況について」（酒井・江坂1954）で事例を報告した。江坂は1960年に刊行した『土偶』（江坂1960）の中でも、特殊な遺構から出土した土偶に触れている。

さらに野口義磨も1964年の『日本の土偶』（野口1964A）で、特殊な遺構から出土した12例を取り上げ、その結果と

して、土偶は玩具や装飾品ではなく、きわめて重要なものとして取り扱われたと推察した。

以上のように出土状況への注視が続く中、寺村光晴は1961年の『柝倉』（柝尾市教育委員会1961）の報告において、発掘調査で得られた土偶3例の特殊な出土状態を報告した。そして他遺跡の事例も含め、土偶の出土状態について、①任意形態＝土器・石器に混じって偶然発見されるもの、②埋納形態＝ピットや土坑の中に埋納されたもの、③埋蔵形態＝土器などの中に埋蔵されたもの、④安置形態＝土壇や台石の上に安置されているもの、⑤石囲い遺構などから出土したものに分類した。

加えて寺村は、これらのバリエーションの存在を踏まえた上で「この五形態がそれぞれ土偶の使用法的一端を示したものであるとすれば、土偶は信仰的なものでも、単一つの目的のためのみに行われたものではなく、その用途は極めて多彩なものであり、ある信仰的儀礼の過程においてそれぞれの意味を果たした」のであり、「それが一連の儀礼過程に認められる姿相の変化としても、それぞれに異った意味を果たして行ったものに違いない」と論じた。

以上のような出土状況の分析から、土偶の役割が単一ではなく、バリエーションに富む可能性が明確になってきたと見ることもできよう。現在、土偶の機能・用途は単一とする論調が強いように見えるが、その源の1つとして、八幡や寺村達の作業は位置付けられるだろう。

一方で、その対極にある理解の意味も再度考えてみる必要があるかも知れない。ここで改めて注目したいのは坪井正五郎の示唆である。

既に紹介したように、土偶の用途は表面に現れた人の形より、その内面に込められた意識の中にあることを坪井は指摘した。形式的変化と地域的差異を明確化し、出土状況などのバリエーションを把握することは確かに極めて重要な作業であり、そこから差異と多様性を見出すことも大切な作業である。しかし一方で、坪井の示唆を改めて見直し、「多様」な現象から「共通」する現象を抽出し、そこから製作・使用した人々が継承し続けた意識を洞察しつつ土偶の機能・役割の核心を捉えること、土偶の意味の根源を探ることもまた喫緊の重要な課題であるように思える。

ところで、上記二つの新機軸以外でも八幡の研究姿勢は、後の研究者に大きな影響を残している。その一つは地母神的解釈に対する批判である。「地母神説」の端緒は1922年の鳥居龍蔵の論考（鳥居1922）に遡るが、八幡は縄文時代に農耕が行なわれた痕跡が見られないことを根拠に、鳥居の主張を否定している（八幡1939）。

この論調はその後も現れる「地母神説」的な解釈——例えば後述する水野正好の土偶祭祀論（水野1974）に対しても、同様な形でしばしば持ち出されている（藤沼1997、春成1999）。この点については改めて述べたい。

また、八幡は上記の国外の土偶に目を配るべきことも主

張している（八幡1939）が、これは上記の二つつの新機軸とセットで、昭和後期以降の論者が示す研究課題にも大きな影響を与えた。例えば、後藤和民は1964年に著した「土偶研究の段階と問題点（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）」（後藤1964A・B・C）の中で、今後の研究課題として「（1）土偶そのものの形から判断する。（2）土偶の時代様式と地方様式を追及して、ゆるぎない体系を確立する。（3）遺跡内における土偶のあり方から土偶の持つ意味を明らかにする。（4）日本以外の地域の古代人の土偶と比較する。」の四点があり、うち（1）と（2）が限界にあること、（3）と（4）が暗中模索の段階にあることを指摘している。

また小野美代子は、1984年に上梓した『土偶の知識』（小野1984）の中で、「機能論一辺倒の土偶研究に対する反省から、もっと地道に土偶そのものを観察し、個々の遺跡の出土状況分析や土偶の製作技法の吟味を行い、型式学的な分類に基づいた時間的・空間的分布状況を把握していこうという流れが大筋」だと位置づける。そして、「現実の資料の裏付けが無いままに自説に都合の良い資料だけを用いた機能論もまだまだ見うけられる」が、「土偶の機能については、まだ何も分かっていないというのが現実」だと指摘した。

そしてこれを乗り越えるための課題として、（1）各地域の土偶の時間的・系統的な位置づけ、（2）土偶の製作技法の吟味、（3）出土状態に対する吟味、（4）周辺の石器時代文化との比較を掲げた。同様な主張は、米田耕ノ助も論じている（米田1984）が、いずれも八幡の主張の建設的な延長線上にある意見として位置づけられるだろう。

視点を改めて昭和前期の論者達に戻そう。1943年、中島寿雄は「石器時代土偶の乳房及び下腹部膨隆に就いて」（中島1943）を公表した。東京大学人類学教室の所蔵品のうち、胸部と腹部を観察できる土偶110点を中島は観察し、男性土偶と断定できるものがないこと、約8割が女性としての何らかの特徴を有していることを導いた。そして、「本邦石器時代土偶は或は欧州旧石器時代後期のVenus像と関連を持つもの」と推察した。

さらに中島は、土偶が破損して出土する理由は悪疫などの災禍から逃れるためだと論じ、いわば「身代わり説」の原型を提示する一方で、長野県広見遺跡のように石囲い内から出土する土偶などを踏まえると、土偶の性格を「呪物」に限定して理解するのは難しいと述べ、併せて全ての土偶が欠損しているわけではないこと、女性を表現する理由などについてまだ問題が多いことを指摘している。

1950年、藤森栄一は縄文中期農耕論を進める中で神話的解釈を取り入れながら、土偶の性格を地母神や穀物神だと想定し、その後、魅力ある書物にまとめている（藤森1970）。

例えば藤森が取り上げた日本書紀や古事記には、土偶を解釈する際に極めて魅力的に見えるストーリーがいくつか掲載されている。例えば日本書紀では、スサノヲがオオゲ

ツヒメを殺害し、その死体をばらまいたところ、それぞれの遺体断片からカイク・イネ・アワ・アズキ・ムギ・ダイズが生まれ出て、そこから食物栽培が始まったとする物語がある。同様な物語は古事記のツクヨミがウケモチを殺害した神話にも見られる。

これらのストーリーは日本の神話だけでなく、インドネシア・メラネシア・ポリネシアから南北アメリカ大陸でも、いわゆる「ハイヌウェレ」型の神話として広く見られ、以降、幾度となく否定されながらも根強く土偶の解釈に採用され続けている（吉田1986ほか）。

1959年、八幡一郎は従来の研究方法を改めて吟味し直した。そして、土偶の用途としてそれまで提示されてきた神像説・護符説・呪物説を再検討し、かつて自らが否定した護符説を一転支持し直した（八幡1959）。

1960年、江坂輝彌は著書『土偶』の中で、当時確認されていた土偶を全国的に集成し、地域毎・時期別に整理して分析を加え、土偶の文化的な位置づけとしては「女神像」説が考慮に値すると論じた（江坂1960）。

また、江坂は「人々が腕や足を負傷した場合、土偶の腕や足を折損して捨てた」と述べ、中島寿雄が戦中に述べた「身代わり像」に近い推察を示した。なお、この意見に対しては、（1）土偶がわざと壊されていたとする証拠は薄いこと、（2）女性の造形を強調するという土偶の特色と関連性が薄いことなどから否定的な意見も出されている（藤沼1997）。

ここで、視点を土偶以外の関連遺物に一度移してみたい。以上と前後するが、1939年、甲野勇は「容器的特徴を有する特殊土偶」（甲野1939）を発表した。これは中期以降に出土例が増加する筒形土偶・容器形土偶と呼ばれる遺物について、初めて本格的に取り上げたものといっただろう。

甲野は、空洞の徳利状をした6例の土偶を紹介し、翌年には「土偶型容器に関する一二の考察」（甲野1940）で、この空洞徳利状をした土偶について普通の土偶とは異なり容器的色彩を有することから「土偶型容器」とするほうが適切であること、時期的には縄文時代最終末期の彌生時代のものであること、「幼くして死せる者の骨を入れる為に母性的性質を有する土偶形容器を製作した」と考えられることから、用途としては小児骨を入れるためのものであり、改葬骨を納める蔵骨器であることを論じた。

1943年、続いて神林淳雄が「筒型土偶について」（神林1943）を公表し、既知の筒型土偶とその類似土偶を8大別し、筒型土偶の年代を縄文時代後期の初めだと推察した。また、縄文時代終末から弥生時代に普及した容器形土偶については、その後、荒巻・設楽が「有髯土偶小考」（荒巻・設楽1985）の中で考察を加えている。

なお、芹沢長介は1974年に「大分県岩戸出土の「こけし」形石製品」（芹沢1974）の中で、縄文時代の土偶の基本形

態をバイオリン形、逆三角形、十字形、こけし形、大の字形に五大別した上で、岩戸遺跡の「こけし」形石製品から、上黒岩遺跡の刻線礫、そして縄文時代の土偶への系譜を想定している。

（４）昭和後期の研究

1964年、野口義麿は『日本原始美術 2 土偶・装身具』の「土偶・土版」（野口1964B）の中で、「土偶の用途」は「そのときどきに依じて様々であったと判断されよう。」と述べ、土偶の用途研究に関して限界を感じたかとも読める発言をしている。

1974年、このような研究状況を打破し、その後の土偶研究に大きな影響を与える画期的な論考が、水野正好によって提出された。「土偶祭式の復元」（水野1974）である。

水野はそれまでの研究史の限界と研究の停滞を見つめ直し、次のような二つの問題点を指摘している。その第一の問題点は、「見た目からする直感、国の内外の宗教学や民俗学からする帰結を援用した把握、神道家としての信念からする刻然性など」をベースとした検討姿勢であり、第二の問題点は、「土偶、自体を凝視」する姿勢や「その出土状況を凝視しようとする視座に乏しく、他の先学の人々が示す成果なり、視座に安易によりかかる傾向が強い」点である。

その問題点を克服すべく、水野は「考古学以外の分野での成果を取り入れることはあえて行わず、始終、土偶自体を凝視し、その出土状況を組み成して祭式の実態を具体的に復元」しようとした。そして、まずその造形的な特徴を踏まえ、全ての土偶は成年女性を表現したものであると規定し、「第一相 母となるべき女、第二相 子どもをやどす女、第三相 子どもを育てる女」の三相に分類した上で、あるシステムを持った祭式が土偶を取り巻く世界に存在することを想定し、土偶の破損は「死の表現のひとつのあり方」であること、土偶祭式は受胎、死、再生といった輪廻を持つものであること、土偶祭式の根底は輪廻で、「縄文時代の時代を示す思念」であることを指摘した。

水野の論は「地母神」説の一つとして評価されることもある（藤沼1997・春成1999）が、そもそも用途論を越えたシステム—祭式—の復元であり、縄文時代の世界観を体系的に解明しようとした点で画期的な論考だということもできるだろう。

また、水野の土偶論のキーワードは「誕生」・「死」・「再生」・「輪廻」だが、1974年以降、土偶研究ではこれらのキーワードが繰り返し採用されており、その点でも時代を画する重要な論考だったと指摘しても、強調しすぎにはならないだろう。

1977年、小林達雄が水野の「土偶祭式」論をより展開させるアイデアを提出した。いわゆる「粘土塊分割法」にもとづく土偶祭式の復元である。小林は「祈りの形象」（小

林達雄1977）の中で、縄文文化が残した遺物を実用本位の道具（第一の道具）とその範疇を越える「第二の道具」に区分し、後者を代表する遺物として土偶を位置づけた。そして、五体満足な土偶がほとんど存在しないことに着目し、「粘土塊分割法」を想定した。

これは、中期の土偶が粘土の分割塊を組み合わせで成形されている点に注目した議論である。このように成形すると、溝付きの板チョコレートのように壊れやすく製作できると小林は考え、このように成形された土偶は目的の個所で割るために、つまり、もともと故意に破損するために製作されていたと論じた。

このような考えについては、1984年に小野正文が「土偶の分割塊製作法資料研究（1）」（小野正文1984）の中で、山梨県釈迦堂遺跡の資料に基づきながら裏付けようと試みている。水野もまた「死と生一輪廻の造形」（水野1979）の中で、水野「土偶祭式」論をさらに展開し、小林と共に土偶の故意破損説を推し進めている。

土偶の破損が故意であり、その行為を呪術との関連の中で理解しようとする姿勢は、坪井正五郎らに遡る（坪井1895）が、一方で、この姿勢については古くから議論が分かれている。例えば中谷治宇二郎は、1929年の「土偶汎論」（中谷1929）の中で、土偶の研究史や分布について整理しつつ、土偶の破損率が必ずしも土器の破損率よりも大きいわけではないと論じ、坪井の見解に批判を加えている。

昭和後期以降の積極的な批判者の1人は浜野美代子である。浜野は埼玉県赤城遺跡および岩手県立石遺跡等の土偶の製作技法を分析して、「縄文土偶の基礎研究」（浜野1990）、「土偶の製作技術—赤城遺跡出土資料を中心に」（浜野1991）、「土偶の破損」（浜野1992）を著し、小林達雄や小野正文らが示した「分割粘土塊製作法」における土偶の製作技法と破損の関係性を批判的に論じている。

浜野の論の特徴は、土偶の分割技法は認めるが、この技法の目的を「土偶を作り易くするためのもの」と捉え、壊すことを意図した技法ではないと主張する点だ。そして中空土偶の製作技法を観察しても、補強の痕跡なども見出せることなどから「故意破損」はありえないと断じている。

また藤沼邦彦も「土偶—付 土製仮面・動物形土製品」（藤沼1979）や『縄文の土偶』（藤沼1997）の中で土偶の「故意破損」に対する積極的な反論を展開している。

藤沼が注目するのは東北地方で出土する土偶である。これらの土偶には、しばしばアスファルトによる補修痕が認められることから、わざわざ補修する土偶の存在をもって「故意破損」説が成立しないと主張した。そして、土偶の分割塊製作法は、土偶の手足を作り出すのにまだ慣れていない時期の作り方で、壊すための製作方法ではないと断じている。

なお、藤沼が重視したアスファルトでの補修という現象に対しては、原田昌幸が異なる視点から解釈を加えている

（原田2010B）。原田は、中期までのほとんどの土偶が壊され、「いわばワンウェイで縄文世界の『土偶祭式、に供され、破片として送られてしまう』」のに対し、「アスファルトで修復された一部の後期の土偶が示すのは『再生の行為』」だと論じている。加えて、このようなあり方は縄文時代後期以降の東北地方における「土偶祭式のさらなる複雑化を示すとともに、縄文人たちの祭祀観察の中に『甦りの世界観、が生じたことを示す』と主張している。

ともあれ、水野や小林が導入した新視点と、開発件数の増加に伴う発掘出土品数の激増が相まって、1980年代になると土偶研究は再び活性化し、1983年から翌年にかけて、それまでの研究の歴史と現状を紹介する特別展開催と二つの一般書の刊行が進められた。

1983年、山梨県立考古博物館では、第1回特別展『土偶』を開催した。その図録の中で、永峰光一・水野正好はそれぞれ次のような所見を述べている。すなわち永峰は、土偶とは「女性のもつ妊娠・出産の能力から連想した多様な繁殖の願望を多様な姿態に託」されたものだが、中には精霊像や死者像など畏怖の対象になるものもあったと論じている（永峰1983）。

また水野は、土偶とは「産む力あふれる成女」であり、「女性の畑作世界に息づく神」であると述べ、「死した大地」に播かれ、「大地に甦り緑したたる世界を創り出し、「生と死、春と冬の正しい輪廻の根元として、また縄文社会の豊饒の基盤として」存在したと主張した（水野1983）。

一般書の1つは米田耕之助の著作（米田1984）である。米田は、1980年代までの研究史を整理した上で、「いまだに土偶が何の目的をもって誕生し、縄文時代に生活した人々の間でどのように扱われていたかという根本的な質問に対して、明確な答えは得られていない」と指摘した。

そして、後藤和民の言葉（後藤1964A・B・C）を借りて、「編年学的段階」を止揚し、「出土状態」の追求から土偶研究を進めるべきだと論じ、当時確認されていた遺構に伴うおよそ20の例を整理し、さらに土偶の変遷（時期と形態）を改めて示し直した。

その結果、米田は、①土偶とは「時には妖怪に、時には日常生活の姿を投影し」て作られたものであること、②「女性のみが持つ”生命の誕生”という神秘的な」力を崇めるためのもの」であること、③それが故に「女性を象徴する乳房・腹・腰部だけが造形表現の対象となった」ことを述べた。

さらに、④石で囲った例や墳墓から出土した例が10例前後あることから、「誕生は死につながり、誕生の意味で作られた土偶も時期を追って死を意味するものへ変化し」、「死者を体現する困難さから、より誕生の状況を明確に表現するため、妊娠を表現する乳房、腹部の誇張」が進み、「死者である土偶を破壊することによって新たな誕生を願った」こと、⑤「死を意味する具体的な方法として、目を閉

じ」、「異常なまでに大きく目を誇張した」遮光器土偶が出現したり、「直接骨を納めることの可能な容器形土偶」が出現したことを論じた。

米田の著書刊行と同年、小野美代子もまた土偶研究の歴史と現状を紹介する一般書を著した（小野1984）。小野はその著書の冒頭で、①土偶は信仰の対象であること、②集団の祭りの場で使われたものであること、③破壊されて出土するものが多く、また破壊しやすく作られているものが多いが、その機能は破壊によってのみ生じるものではなく、破壊される前にいろいろな機能をもっていたこと、④葬制とも関わりをもち、再生という思想にも大きな関わりを持っていたことを暗示した。

そして、著作のまとめの部分で、①について補足し、特にそのほとんどが女性らしさを強調していることから単なる「呪」の対象としてではなく、何かを期待する「まつり」の対象として作られていたことを述べた。また③に関連して、「『殺す、（＝壊す）というイメージを、プラスの方向に作用するものとしてもっていたのではないか』と推察し、土偶を壊すということは、それがもっている力をより広い範囲に及ぼすためにあること、土偶は豊かな収穫や再生を願って作られたものであり、その再生の力を広い範囲に及ぼすために、壊されてばらまかれたことを推定した。

以上のように小野や米田の論調は、論者の意図とは別に、細部はともあれ、水野正好の土偶論の根幹部分—誕生／死／再生—をベースにしたものであるように見えるが、小野美代子は後年、水野の土偶論における「祭式の根底であるとする輪廻の思想はどの考古学的分野から導き出されてきたものなの」とか極めて辛い批判を加えている（小野1999）。

1987年、磯前順一は「土偶の用法について」（磯前1987）を著し、土偶とは「製作—安置—故意破損—廃棄・埋納—新たな製作」という諸過程を経て用いられたもので、これらの行為をとおして「人間の心・集団・自然のなかの母性性の力の活性化」を願うために用意されたものだと解釈した。これも突き詰めると水野が1974年に提示した土偶論の影響下にあるようにも見える。

（5）平成期以降の研究

1993年、阿部義平は「上黒岩の線刻礫」（阿部1993）の中で、初期土偶に関連する重要遺物の1つである上黒岩遺跡の線刻礫について、文様が重複して描かれていること、鮮やかな像と不明瞭なものとの前後関係が見られることを指摘した。そして、描出→削除→再描出が繰り返されていたこと、これらの行為が呪術的な儀礼のもとに行なわれていたと推察した。上黒岩遺跡の刻線礫については米田耕之助は、「破壊されずに存在しており」、「土偶が破壊されるために作られているのは、根本的に異った性格をもつものである」と述べている（米田1984）。また草創期や早期の土偶の多くは完形品で出土していることを踏まえれば、

上記の指摘は、これら初期の土偶や関連遺物の機能・役割・あり方などを考える上で興味深い示唆といえよう。

同年、鈴木正博は「荒海貝塚研究と大阪湾「ステイニング」風に」、および「荒海貝塚文化の原風土」において、縄文時代終末期から弥生時代の過渡期における土偶の機能変化の過程を捉え、大洞C2式後半の土偶の出土状況の観察などから、祭式を中心とした土偶から葬式に参加する土偶への変質を指摘し、併せて九州型の副葬される土偶との関連を論じている（鈴木1993A・B）。

これに関連する論考として、1996年、設楽博己が「副葬される土偶」（設楽1996）を提示している。設楽はの中で、土偶は呪具であると位置づけた上で、土偶本来の特徴として、成熟した女性原理をほぼ一貫して持っていたこととヒトの埋葬に伴わないことの二点があったが、世界観が明確になった北海道の縄文時代後期後葉に、土偶が副葬の対象となり、縄文時代終末期にはその風習が東北地方南部から東海地方にかけて広まり、中部日本の弥生時代の再葬墓の成立に影響を与えたと論じた。

なお、設楽の見解については、小野美代子が「葬式に参与する土偶の変質の原因を北海道の後期の土偶に求めているが、土偶型式の変遷を考えるといかがなものか」と疑念を示している（小野1999）が、土偶自体の造形的な型式を重視するか、土偶の使用に関わるシステム・風習の型式を重視するかで議論が分かれるところかも知れない。

1997年、藤沼邦彦が土偶研究の歴史と現状を紹介する一般書を刊行した（藤沼1997）。藤沼は、①大きな乳房、妊娠を示すような大きくふくらんだ腹部などの表現を根拠として、出現段階から土偶は女性＝母性を強調していること、②土偶とは「精霊をイメージしたもの」であり、女性の形を強調したものであるから「新しい生命を生み出し繁殖させる力をもつ」ものであることを推察した。

さらに、③「縄文人は、さまざまな精霊たちと深く交感することができ、ひたすら祈願し感謝すれば、相応の報酬を与えてくれる」と信じていたこと、④土偶とは「縄文人にとって歓迎すべき精霊」が宿る「依り代」であり、「精霊が宿ると、土偶は精霊そのものになり霊力を発揮」し、その霊力は「自然界の動植物の繁殖・豊穰、縄文人の子孫繁栄などに発揮」されたことなどを説いた。

これらの意見もまた、水野正好の土偶論（水野1974）が取り入れられているようにみえるが、藤沼は水野の論を「農耕社会を背景としたヨーロッパの新石器時代の地母神的な解釈に類似した考え」であり、「食料採集経済に頼っていた縄文時代に、そのまま当てはまるとは思えない」と述べ、本格的な農耕社会に移行した弥生時代になるとむしろ土偶は消滅していくことを証左の一つだとしながら水野の意見を否定している。

同様な批判は春成秀爾も述べている（春成1999）が、これらの論法は八幡一郎が鳥居龍蔵に放った批判と同じもの

（八幡1939）とあってよいだろう。

それはともかく、「再生と繁殖を祈念するもの」という土偶の位置づけに関しては、藤沼は水野の論を否定していないように見えるし、むしろ大いに影響を受けたように見える。

もしそうだとすれば、藤沼が否定したいのは、水野の立論の背景に想定可能であり、またかつて藤森栄一も拠って立った神話的解釈ではなかろうか。筆者は、たちまちこれらの神話的解釈に同調するものではないが、近年、土器圧痕の分析などから縄文時代中期にダイズが栽培されていた可能性が指摘されていること（中山ほか2008）を考慮するとあながち荒唐無稽な論ではなく、改めて検討対象に含むべき余地があるとも考える。

なお、藤沼は上記の著書の中で、北海道では後期から晩期にかけて、土偶が墓域や墓穴で発見される例が増加することから、「埋葬儀礼の1つとして、土偶祭祀が存在した可能性」も指摘している。

ともあれ1990年代もまた、土偶研究史上の大きな画期として良いだろう。1994年からは「土偶とその情報」研究会が全国の各時期、各地域の土偶の集成を組織的にかつ悉皆的に進めた。その成果はシンポジウムで議論され、資料集として『東北・北海道の土偶Ⅰ』（平成6年）、『関東地方後期の土偶—山形土偶の終焉まで』（平成7年）、『中部高地をとりまく中期の土偶』（平成8年）、『東北・北海道の土偶Ⅱ—亀ヶ岡文化の土偶』（平成8年）、『西日本をとりまく土偶』（平成9年）が刊行され、さらにその成果をまとめた論集として、『土偶研究の地平』1～4が刊行されている（「土偶とその情報」研究会1994・1995・1996A・1996B・1997A・1997B・1998・1999・2000）。

これらは八幡一郎が1939年に提言した第1の新機軸—型式学的・編年学的資料操作（八幡1939）—を体系的に実践した好例と言って良いだろう。

その一方で、1996年、八幡一郎らが提唱した研究理念・手法と一線を画す流れを渡辺仁が提示している（渡辺1996）。

渡辺は、現在の縄文考古学者の研究方法を、モード1＝資料の記載のみに終わるグループ、モード2＝用途論や機能論への興味はあっても科学的な解釈の方法を持たないグループ、モード3＝理論考古学を目指すグループの三者に分類した。そしてモード1・2を否定し、モード3の科学的なアプローチによって考古学的事象の人類学的理論化を目指すべきこと、そのための手法として、考古学の解釈に民族誌的情報を援用すべきことを説いた。

八幡一郎の1939年の指摘（八幡1939）以降、それまでに比べれば民族誌の援用はかなり控えられてきたと言って良い。その一方で、渡辺と同様に民族誌の援用の有効性を指摘する論者もいる。例えば1969年、国分直一は「呪術—その役割」の中で、「資料」を「骨」にたとえて主張を論じ

ている（国分1969）。

すなわち、新石器時代の遺跡から出土する遺物は「まさにかさかさの骨の断片に過ぎない。その骨に肉を付け、それを創った人々の社会を再生させようとする、たいへんである。だから考古学者は、多くの場合、骨を精密に記載報告するにとどめて、それ以上の発言を押さえるのが普通である」と述べ、続けて「それにもかかわらず、遺物をつくった人々の社会に迫ることを、いつまでも怠っていることは許されないのである。この場合にわれわれは、遺物や遺跡に対する有効な説明を、未開社会の中に見いだすことはしばしばである」。「セシル＝カーウェンやグラハム＝クラークは、ヨーロッパ民俗学が提示したデータを活用して、ヨーロッパの遺跡や遺物を、見事に機能的に分類することに成功した。すなわち民俗学の援用であった。私は「呪術—その役割」の問題に入ってゆくために、これら協力学の援けを、遠慮なく借りることにしたい」と述べた。

以上のような民族誌を重視する渡辺らの意見に対し、小野美代子は「考古学の解釈に民族誌的情報を援用する土俗考古学の有効性については、過去に、土俗学や民族学、宗教学などそれぞれの分野の研究者が、自分の分野の知識を土台に、勝手な解釈を施してきた遺物の代表が「土偶」であったことを考慮すると自ずから慎重にならざるを得ない」と否定的見解を述べている（小野1999）。

民族誌的事実の援用に関する私見については別稿（瀬口2009、p27・28）で述べたことがあるので、ここでは詳述しないが、土偶研究を進めるにあたっては出土資料を限界まで吟味しつつ、その限界を補う形での援用を考える形はあり得るかも知れない。

ともあれ、ここで改めて平成期の土偶研究に視点を戻してみたい。2000年、榊原功一は「『土偶装飾付土器』について」（榊原2000）を著した。土偶装飾付土器とは、中期前半貉沢式期に出現し、勝坂式土器分布圏で普及した土器で、土器の内面を向く形で有脚立像土偶が土器器面に装飾されるものである。榊原は丁寧な集成をもとに、その変遷、出現の意義、系譜などを論じた。その結果として、妊娠・出産という女性原理を有した土偶と、食物を生み出す機能を有する土器との融合を示唆した上で、藤内式後半期になると頭部がみみずく把手に変化し、多くの把手付土器の文様モチーフになるという重大な現象を指摘している。土偶のみならず、中期の土器に対して付与された縄文人の世界観を読み解いていく上で極めて重要な論考だと言えよう。

2010年、原田昌幸は、土偶の「祭祀構造」とその「階層性」について始めて本格的に整理し、①「発生期の土偶が示唆する縄文世界の祭祀構造」は、「堅穴住居を単位とした家族集団の個々が家族祭祀の目的で」土偶を用いるものであること、②その祭祀の目的は「家族単位の子孫繁栄や安産など」であること、③「多少の変化があったにせよそれは縄文時代前期後葉まで一貫した普遍性をもって継続」

したことを述べた。

そして、④縄文時代前期末における立像土偶の確立とともに、土偶に階層性が生じ、⑤大多数の土偶は故意に破壊される土偶として「分割製作技法」で製作され、「縄文社会の中で祭祀に使用される過程、あるいは直後に頭を壊され、四肢をもぎ取られ、ばらばらの破片として集落の各所にまかれ、あるいは「送られた。」反面、⑥「特に念入りに作られた、限られた土偶のみは、長らく集落や集団の祈りの象徴として祭祀の場面に供され、あるいは祀られ続け、その後は壊されることがなく、あたかも土偶それ自体に人格を認めたかのように、丁寧に埋葬された」ことを論じている。

そのほかにも原田は土偶に対して興味深い解釈を深めている。例えば、東北地方の縄文時代前期の多くの土偶の胴部中程には、凹み表現や細い粘土紐の貼り付けによる円形文がしばしばつけられる。その意味について原田は「子供を宿す母体」を象徴する妊娠表現だと読みとっている。

また長野県目切遺跡や尖石遺跡で出土した縄文時代中期の「壺を抱くポーズ土偶」についても、その壺は「えな壺」であり、「出産に関わる儀礼の一場面を表現した」土偶だと論じている。

他方で、山梨県上黒駒遺跡から出土した縄文時代中期のポーズ土偶については、その異形をもって「仮面」を被りながら祈りを捧げる「司祭者」であり「俳優」だと推測している。

（6）西日本における試論とその展開

東日本に比べて出土量が少ないこともあって、西日本の土偶に関する本格的な論述は少ないが、昭和後期以降、いくつもの論考が提示されている。その嚆矢となったのは、1983年の片岡肇の「近畿地方の土偶について」（片岡1983）で、ここにはじめて関西地方における資料の集成作業が行われた。

西日本において土偶研究が盛んになるのは1990年代以降と言って良いだろう。この頃から「中九州縄文後晩期の遺跡—土偶から見た集落間の交流—」（富田1990）、「近畿地方後・晩期の土偶」（岡崎1992）、「西日本の土偶—主にその分類と系統について—」（井上1993）、「東海地方西部における縄文晩期土偶」（岡本1993）といった論考が提示され始めている。

ことに興味深いのは、土偶関連遺物である岩偶を扱った寒川朋枝の論考である。寒川は2002年の論考「祭祀行為についての検討—軽石製岩偶を素材として—」の中で、九州南部で出土する岩偶について整理し、当該地域の岩偶は①縄文時代後期後葉～晩期初頭のものであること、②凹みをもつものが多いこと、③凹みが設けられる部位は、時期の推移に伴い胸部・腹部から顔部へ移ったこと、④生殖器を表現している可能性があるものもあること、⑤堅穴状遺構

や凹地状遺構、貝塚などが選ばれて廃棄されていた可能性があることを論じている（寒川2002）。

また仮面については、2010年に山崎純男が「九州における貝製仮面について」の中で貝製のものを対象に論を重ねた（山崎2010）。山崎は先行研究である島津義昭（島津1992）の研究なども参考にしつつ、貝製仮面の分類と消長などを整理し、①形態的には2類に分かれ、目孔+口孔を持つ阿高型、口孔を欠く黒橋型があること、②前者から後者へ移行すること、③大きさからは着装可能な大型と着装不可能な小型があることを論じた。

そして3段階区分を提唱し、Ⅰ期（縄文時代中期後葉）は阿高型段階、Ⅱ期（後期初頭）は大型の黒橋型段階、Ⅲ期（後期前葉～中葉）は小型の黒橋型段階だと論じた上で、貝面は出現当初から着装可能な大型の実用品と、実用には出来そうにない小型品があることを述べた。

さらに土面との比較で、実用品から儀器化する傾向を踏まえ、いずれも祭祀関連遺物だと定義した上で、土面が割れて出土することが多いのに対し、貝面は完形品で出土する傾向を重視し、廃棄の仕方に相違を指摘した。そして朝鮮半島との関連から、九州西岸海域の漁労民の祭祀に関わるものだと主張している。

2005年と2010年、伊藤正人は「顔の輪廻—土偶と土面の西東—」（伊藤2005）、「縄文時代の顔表現」（伊藤2010）と題した論考を公表し、人形表現の変遷や土偶や土面の顔表現について整理した。これらは1997年に川合剛と共に行った作業（伊藤・川合1997）を展開した労作である。

この中で伊藤は、①「縄文時代の人々は、ヒトの具象表現に対して忌避（拒否・拒絶・禁忌）を持っており」、②草創期には顔を積極的に表現しない胴体中心の土偶や磔偶が現れたこと、③東日本ではその傾向が前期まで継承されるが、中期になると顔の表現を定着・発達させること、④しかし、西日本では人形そのものさえ表現しないという意志が前期に芽生え、東西で異なる価値観が現れたことなどを論じた。

さらに、⑤中期に九州地方で貝面が出現し、瀬戸内地方東部へ影響して土面を成立させたこと、⑥土面はその後東日本に伝わる反面、西日本では廃れてしまうことを論じ、⑦「東日本の中期土偶が、豊饒や再生を象徴するカミヤ精霊の姿を表現する、あるいは、これに類するハレ・正・陽・善といったイメージを象徴するのに対し、西日本ではそのイメージを偶像として表現することは「許されなかった」と主張し、⑧西日本における「具象化された顔のイメージ」とは東日本の土偶と対極にある「ケ・負・陰・悪または闇や魔・病や死を象徴するもの」と捉えた。

伊藤の論の最大の特徴は、「ないこと＝忌避」と考え、顔表現や土偶という人体表現が、「忌避」されていたために存在しなかったと考える立場である。土偶の少なさ、顔表現の少なさは西日本縄文文化における世界観に深く関わ

るだけに、伊藤の指摘は興味深い、それとは異なる解釈もいくつか提出されている。本章の最後にそれらの考えをいくつか整理し、締めくくりたい。

伊藤と異なる解釈の代表例は大野薫と小島孝修の主張である（大野2003・小島2000）。このうち、大野は忌避という積極的な理由ではなく、「顔面を表現する意図がない」から存在しなかったとシンプルに論じた。

一方、小島の考え方の最大のポイントは「必要ないから存在しなかった」と考える点にある。小島は「縄文中期土偶の地域性」の中で、土偶の目的は「植物質食料の獲得・利用に関わる可能性がある」とし、土偶の出土傾向と植生の関係について検討を試みようとした。そして、最終的に西日本で土偶が定着しなかった理由を、「照葉樹林帯においては、土偶にとくに依拠しなくても、生活していただくの食料を得ることが可能だった」からで、土偶を「必要としなかったために」、「定着しなかった」と主張している。

また、大野淳也の岩偶に関する意見も注目に値するだろう（大野2007）。大野はその全国的な集成と類型化を試み、各類型の分布や系譜関係を整理した。結果、これまで関係性が不明確だった後期から晩期にかけての時期的変化が把握できること、北陸地方がその関係を埋める上で重要な位置にあったことを指摘し、併せて岩版類の性格について論を重ねた。

大野が特に注目したのは、岩版類の全体形状が「手足を欠く胴体だけのもので、顔をも定かには描出しない抽象的なものに終始している」点であり、それ故にその表現対象は「祖霊や精霊などの、儀礼の時点では姿形をもたない抽象的な人格」であり、累積の著しい拠点的な遺跡から出土することが多いことから「累代の祖先をもつ集団の祖霊を表現した可能性が高く」、「岩版類は霊の「抛り代」として用いられたもの」と想定している。この大野の意見の最大のポイントは、「抛り代」であるが故に顔がないと示唆している点であり、積極的に深めるべき示唆かも知れない。

3. まとめ 土偶の機能・用途に関する理解の移ろい

以上、特に土偶の機能・用途に関する考古学者の理解の移ろいに注目しながら土偶研究130年の歴史を振り返った。その結果は図1のとおりで、概要は以下のとおりである。

（1）宗教関連遺物としての理解の出現と展開

土偶の機能・用途を宗教関連遺物の範疇で理解する流れは1880年代に遡る。その嚆矢は図1の【A】のとおり、1886年の白井光太郎で、ほかに「装飾携行品説・玩弄具説」も提示しつつ、「神像」・「護神牌」の可能性を示唆した。

白井が述べた案のうち、「神像」説は1890年代の坪井正五郎によって継承され、まず【B】のように「宗教上のもの」として理解されるようになったように見える。以降、土偶は宗教関連遺物だとする考え方はより一般的となり、

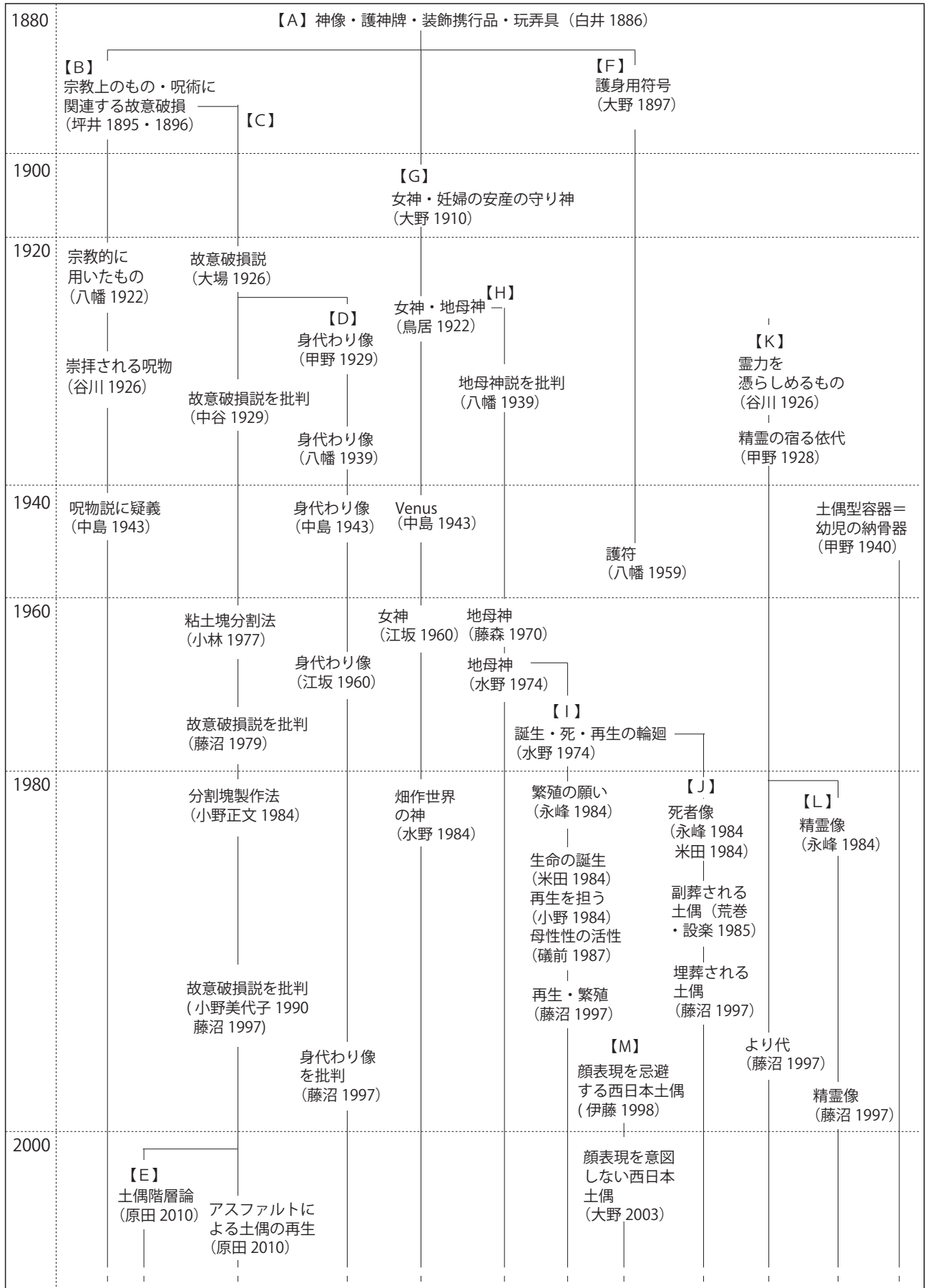


図1 土偶の機能・用途に関する理解の変遷過程

以降、八幡一郎や谷川磐雄らによって継承されていった。

また同時に坪井は、1890年代に呪術に関連するという認識の上に「故意破損」説の原型を提示した。この理解は、

【C】のように度々批判されながら小林達雄らにより継承され、2010年には原田昌幸により、壊される土偶と残される土偶の二者からなる「土偶階層論」が提示されるに至っている。

さらに「故意破損」説は、1920年代になると【D】のような「身代わり像」説へと派生的に展開し、さらに1970年代には、後述する【I】のような水野正好による「誕生・死・再生の輪廻」論にも影響を与えた。

なお、白井が【A】で示した推察のうち、「護神牌」説は、【F】のように「護身用符号」として1890年代の大野延太郎が継承し、以降、1959年の八幡一郎などによって継承されたが、その後、目立って支持する意見は少ないようである。

（2）女神像としての理解の出現と展開

白井が【A】で示した推察のうち、「神像」説は、1910年代には、大野雲外（延太郎）が継承し「女神・妊婦の安産の守り神」とする理解を公表した。このうち「守り神」概念は【F】の延長線上に位置付けられるかも知れない。ともあれ以降、「女神説」は【G】のように鳥居龍蔵、中島壽雄、江坂輝彌などに継承され、多くの研究者の支持を得ている。

このうち、鳥居は1920年代に女神説へ「地母神」説を付加・発展させた。以下、地母神説は【H】のように藤森栄一、水野正好らによって継承・展開され、土偶論において大きな潮流を作り出すに至った。

特に重要な流れは1970年代に、水野により提出された「誕生・死・再生」の輪廻という概念である。この概念は、水野の主張を批判的に捉える論者にも意識的・無意識的に活用され、【I】のように1980年代以降の多くの論者に継承されているように見える。

加えて、水野の土偶概念の直接的な系譜上にあるとは必ずしも言えないが、特殊な出土状況を示す土偶資料の観察結果とも相まって、1980年代から【J】のように「死」との関わりの中での理解も目立つようになる。

（3）依代としての理解の出現と展開

鳥居龍蔵により「地母神」説が提示された1920年代、ほぼ同時期に、谷川磐雄によって「依代」説の原型が提示され、以降、その理解は【K】のように甲野勇らによって継承された。なお谷川が「霊力」の宿りを想定したのに対し、甲野は「精霊」の宿りを想定した。この甲野の考えは、以

降、【L】のように永峰光一や藤沼邦彦に継承されている。

（4）おわりに

以上のほかに、1990年代に伊藤正人により起点が設けられた【M】のような「顔表現」を持たない土偶達の評価も、草創期から前期や、西日本における土偶の機能・用途・本質を今後問うていく上で、重要な議論の論点になっていくものと考えられる。この点は、東日本における顔表現の展開の意味、顔を持つ土偶達の意味も同時に浮かび上がらせてくれるはずだ。この理解の流れも注目しながら検討を進めてみたい。

最後に、土偶の機能・用途論だけでなく、そのアプローチの方法やその現状についても少し触れておきたい。

八幡一郎が1939年に新機軸を提言して以降、型式的变化と地域的差異を明確化し、出土状況などのバリエーションを把握しながら土偶を取り巻く世界とその多様性をより正確に把握する努力が多くの先学により払われてきた。その努力はかなりの精度で熟成しつつある。特に1990年代には組織的に網羅的な資料集成と多くの型式学的・分布論的検討が積み重ねられ、多くの成果が蓄積された。

その一方で多くの論者が語ってきた、土偶の機能・用途論の展開の難しさは解消されていないようにも見える。もし、その打開のために視点を変える必要があるならば、今後の課題は、「多様」な現象や系統的な変化の把握に加え、多様性の中から「共通」する現象を抽出すること、そこから製作・使用した人々が継承し続けた意識を洞察しつつ土偶の機能・役割の核心を捉え、土偶の意味の根源を探るところにヒントがあるように思えた。

関西地方は土偶の出土量が比較的に少ない地域であるが、その一端に位置する琵琶湖周辺地域は日本列島における「土偶」の原型が出土する地域でもある。その調査に携わる機関の一員として、八幡一郎以降の努力とその積み重ねを重視しつつも、新たな視点に目を配りながら検討を重ねてみたい。

[謝辞] 相谷熊原遺跡の現地調査を担当した松室孝樹・重田勉には様々な助力を得た。また、小島孝修氏、総合地球環境学研究所の中村大氏・榎林啓介氏、鹿児島大学寒川朋枝氏には文献の収集や発想の展開などでお世話になりました。お礼申し上げます。

挿図典拠

図1 瀬口作成。

（せぐち しんじ：調査普及課 主任）

表1 主要論考一覧（1）

著者	発表年	論考名
秦樟丸	1800	『蝦夷島奇観』
西原好一	1826	『耽奇漫録』
白井光太郎	1886	「貝塚より出し土偶の考」『人類学会報告第2号』人類学会
若林勝邦	1891	「貝塚土偶二就テ」『東京人類学雑誌第6巻第61号』東京人類学会
坪井正五郎	1891	「ロンドン通信」『東京人類学会雑誌第6巻第62号』東京人類学会
坪井正五郎	1895	「コロボックル風俗考第八回」『風俗画報第104号』東陽堂
大野延太郎	1897	「土偶と土版の関係」『東京人類学雑誌第12巻第131号』東京人類学会
坪井正五郎	1898	「貝塚土偶の男女」『東洋学芸雑誌第15巻第197号』東洋学芸社
坪井正五郎	1899	「コロボックルの宗教的遺物」『東洋学芸雑誌第16巻第209号』東洋学芸社
大野雲外	1910	「土偶の形式分類に就て」『東京人類学会雑誌第26巻第296号』東京人類学会
高橋健自	1913	『考古学』聚精堂
鳥居龍藏	1922	「日本石器時代民衆の女神信仰」『人類学雑誌第37巻第11号』東京人類学会
八幡一郎	1922	「信濃諏訪郡豊平村広見発見の土偶」『人類学雑誌37-8』東京人類学会
甲野勇	1924	「所謂遮光器文様其の他」『人類学雑誌第39巻第7・8・9号(合併号)』東京人類学会
鳥居龍藏	1924	「石器時代の遮光器に就て」『人類学雑誌第39巻第2号』
長谷部言人	1924	「石器時代土偶の所謂遮光器に就て」『考古学雑誌第14巻第10号』考古学会
谷川磐雄	1926	「土偶に関する二・三の考察」『國學院雑誌第32巻第5号』(『大場磐雄著作集第一巻』雄山閣)
谷川磐雄	1927	「土偶の社会学的考察」『國學院雑誌第32巻9月号』國學院大學
中谷治宇二郎	1929	「土偶汎論」『日本石器時代提要』岡書院
甲野勇	1939	「容器の特徴を有する特殊土偶」『人類学雑誌第54巻第12号』東京人類学会
八幡一郎	1939	「日本先史人の信仰の問題」『人類学・先史学講座第13巻』雄山閣
甲野勇	1940	「土偶型容器に関する一二の考察」『人類学雑誌第55巻第1号』東京人類学会
神林淳雄	1943	「筒型土偶について」『人類学雑誌第58巻第6号』日本人類学会
中島壽雄	1943	「石器時代土偶の乳房及び下腹部膨隆に就いて」『人類学雑誌第58巻第7号』東京人類学会
酒井忠純・江坂輝彌	1954	「山形県飽海郡藤岡村杉沢発見の大洞C2式の土偶の出土状態について」『考古学雑誌第39巻第3・4合併号』日本考古学会
山崎義男	1954	「群馬県郷原出土土偶について」『考古学雑誌第39巻第3・4合併号』日本考古学会
八幡一郎	1959	「日本の先史土偶」『MUSEUM第99号』東京国立博物館／美術出版社
江坂輝彌	1960	『土偶』校倉書房
栃尾市教育委員会	1961	『栃倉』
後藤和民	1964 A	「土偶研究の段階と問題点(I)」『考古学手帳第22号』考古学手帳同人
後藤和民	1964 B	「土偶研究の段階と問題点(II)」『考古学手帳第23号』考古学手帳同人
後藤和民	1964 C	「土偶研究の段階と問題点(III)」『考古学手帳第24号』考古学手帳同人
野口義麿	1964 A	『日本の土偶』紀伊國屋書店
野口義麿	1964 B	「土偶・土版」『日本原始美術2土偶・装身具』講談社
国分直一	1969	「呪術—その役割」『日本文化の歴史第1巻 大地と呪術』学習研究社
藤森栄一	1970	『縄文農耕』学生社
芹沢長介	1974	「大分県岩戸出土の「こけし」形石製品」『日本考古学古代史論集』吉川弘文館
水野正好	1974	「土偶祭式の復元」『信濃第26巻第4号』信濃史学会
小林達雄	1977	「祈りの形象」『日本陶磁全集第3巻 土偶・埴輪』中央公論社
水野正好	1979	「死と生—輪廻の造形」『日本の原始美術5』講談社
片岡肇	1983	「近畿地方の土偶について」『角田文衛博士古稀記念 古代学叢論』角田文衛先生古稀記念論集刊行会
永峯光一	1983	『土偶』(第1回特別展図録) 山梨県立考古博物館
水野正好	1983	『土偶』(第1回特別展図録) 山梨県立考古博物館
小野正文	1984	「土偶の分割塊製作法資料研究(1)」『丘陵第11号』甲斐丘陵考古学会
小野美代子	1984	『考古学シリーズ18 土偶の知識』東京美術
米田耕之助	1984	『考古学ライブラリー21 土偶』ニューサイエンス社
荒巻実・設楽博巳	1985	「有髻土偶小考」『考古学雑誌第71巻第1号』日本考古学会
磯前順一	1985	「筒形土偶について」『常総台地第13号』常総台地研究会
吉田敦彦	1986	『縄文土偶の神話学』名著刊行会
磯前順一	1987	「土偶の用法について」『考古学研究第34巻第1号』考古学研究会
高柳圭一	1987	「東北地方に於ける縄文時代後期後半の土偶」『遡航第5号』早稲田大学大学院文学研究科考古談話会
鈴木正博	1989	「安行式土偶研究の基礎」『古代第87号』早稲田大学考古学会
富田紘一	1990	「中九州縄文後晩期の遺跡—土偶から見た集落間の交流—」『乙益重隆先生古稀記念九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論集刊行会
奥山和久	1990	「土偶研究史」『季刊考古学第30号』雄山閣
浜野美代子	1990	「縄文土偶の基礎研究」『古代第90号』早稲田大学考古学会

表1 主要論考一覧（2）

著者	発表年	論考名
浜野美代子	1991	「土偶の製作技術—赤城遺跡出土資料を中心に」『埼玉考古学論集—設立10周年記念論集—』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
浜野美代子	1992	『土偶の破損』『研究紀要第9号』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
岡崎晋明	1992	「近畿地方後・晩期の土偶」『龍谷史壇第99・100合併号』龍谷大学
島津義昭	1992	「縄文時代の貝面」『平井尚志先生古希記念考古学論攻第2集』
浜野美代子	1992	「土偶の破損」『研究紀要第9号』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
阿部義平	1993	「上黒岩の線刻礫」『月刊考古学ジャーナルNo.358』ニューサイエンス社
井上蘭子	1993	「西日本の土偶—主にその分類と系統について—」『古文化談叢第29集』九州古文化研究会
岡本茂史	1993	「東海地方西部における縄文晩期土偶」『第1回東海考古学フォーラム・豊橋大会 突帯文土器から条痕文土器へ』第1回東海考古学フォーラム・豊橋大会実行委員会・突帯文土器研究会
鈴木正博	1993	A 「荒海貝塚研究と大阪湾「ステイグ」風に」『利根川14』利根川同人会
鈴木正博	1993	B 「荒海貝塚文化の原風土」『古代第95号』早稲田大学考古学会
「土偶とその情報」研究会	1994	『東北・北海道の土偶Ⅰ』
「土偶とその情報」研究会	1995	『関東地方後期の土偶—山形土偶の終焉まで』
「土偶とその情報」研究会	1996	A 『中部高地をとりまく中期の土偶』
「土偶とその情報」研究会	1996	B 『東北・北海道の土偶Ⅱ—亀ヶ岡文化の土偶』
設楽博己	1996	「副葬される土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告第68集』国立歴史民俗博物館
渡辺 仁	1996	「遺物から道具へ—理論考古学のためのパラダイム転換—」『先史考古学論集第5集』
「土偶とその情報」研究会	1997	A 『西日本をとりまく土偶』
「土偶とその情報」研究会	1997	B 『土偶研究の地平1』
伊藤正人・川合剛	1997	「東海の中・後期土偶」『西日本をとりまく土偶 発表要旨』「土偶とその情報」研究会
藤沼邦彦	1997	『歴史発掘③ 縄文の土偶』講談社
「土偶とその情報」研究会	1998	『土偶研究の地平2』
「土偶とその情報」研究会	1999	『土偶研究の地平3』
植木 弘	1999	「遺物研究土偶（機能論・用途論）」『縄文時代10』縄文時代文化研究会
小野美代子	1999	「遺物研究 土偶（総論）」『縄文時代10』縄文時代文化研究会
春成秀爾	1999	「狩猟・採集の祭り」『古代史の論点4 神と祭り』小学館
櫛原功一	2000	『「装飾付土偶」について』『土偶研究の地平4』「土偶とその情報」研究会
小島孝修	2000	「縄文中期土偶の地域性」『土偶研究の地平4』「土偶とその情報」研究会
「土偶とその情報」研究会	2000	『土偶研究の地平4』
寒川朋枝		「祭祀行為についての検討」『人類史研究 13号』人類史研究会
大野薫	2003	「顔のない土偶」『立命館大学考古学論集Ⅲ—1』立命館大学考古学論集刊行会
伊藤正人	2005	「顔の輪廻—土偶と土面の西東—」『古代学研究168』古代学研究会
大野淳也	2007	「北陸地方における岩版類について」『桜町遺跡発掘調査報告書縄文時代総括編』小矢部市教委委員会
中山誠二ほか	2008	「山梨県酒香場遺跡の縄文時代中期の栽培ダイズGlycine max」『研究紀要第24号』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター（ほか著者：長沢宏昌・保坂康夫・野代幸和・櫛原功一・佐野隆）
瀬口眞司	2009	『縄文集落の考古学』昭和堂
伊藤正人	2010	「縄文時代の顔表現～土偶の顔・土面の顔～」『MASK』大阪府立弥生文化博物館
(財)滋賀県文化財保護協会	2010	『シリーズ近江の文化財004 縄文人のエコロジーとエコノミー』
原田昌幸	2010	A 『日本の美術No.526 土偶とその周辺Ⅰ（草創期～中期）』ぎょうせい
原田昌幸	2010	B 『日本の美術No.527 土偶とその周辺Ⅱ（後期～晩期）』ぎょうせい
松室孝樹・重田勉	2010	「相谷熊原遺跡と日本最古級の土偶の発見」『遺跡学研究第7号』日本遺跡学会
山崎純男	2010	「九州における貝製仮面について」『MASK』大阪府立弥生文化博物館

【編集後記】

本号は、当協会設立40周年を記念する特別号として、ボリュームアップをはかり、職員全員に投稿を呼び掛けたところ、総数17本を掲載することができた。

今回は、近年の注目すべき調査事例である東近江市相谷熊原遺跡に関連した3本の論考をまとめ、小特集とした。松室論文では、相谷熊原遺跡を縄文時代草創期と位置づける根拠となった「矢柄研磨器」について基礎的な検討を行っている。重田論文では、相谷熊原遺跡をはじめとする鈴鹿山中の諸遺跡について、選地原理の抽出を試みた。一方、出土遺物のなかでも特徴的な土偶について、瀬口論文では学説史をたどり、その評価の基礎固めをはかった。こうした検討を進めて、次年度以降、調査報告書刊行に向けて、整理調査を行っていききたい。

その他の論考は、時代・対象ともに実に多様なものとなった。縄文時代を対象としたものに、県内出土縄文土器の資料化と検討を行った小島論文、志那湖底遺跡出土岩田第4類土器群について検討を進めた小竹森論文がある。古墳時代では、辻川論文で県内出土埴輪の資料化と検討作業を行っている。古代を対象としたものには、これも近年の注目すべき調査事例－長浜市塩津港遺跡出土起請文木札に関し、基礎的な検討を行った濱論文や、柱穴構造から掘立柱建物の上部構造について意欲的に復元を試みた横田論文、県内に特徴的な飛雲文軒瓦の比較資料として三重県内の出土事例を報告した中西論文がある。中・近世を主な対象としたものとしては、湖南省夏見城遺跡出土毛抜きを位置づけることを目的として、毛抜きをはじめとした全国の化粧道具出土事例に関する検討作業をおこなった堀論文や、東近江市観音寺城遺跡の構造に関して再検討した伊庭論文、出土将棋駒を手掛かりに将棋史の一端に迫った三宅論文がある。さらに、阿刀論文では、滋賀県立安土城考古博物館での展示に携わったなかで見出された「忍者」研究について現状と課題がとりまとめられている。大沼論文では、琵琶湖を「文化遺産」として捉え、様々な側面からそれを構成する「資産群」の文化的価値について評価した結果、人類にとって「顕著な普遍的価値」を有する遺産であると結論付けている。具志堅論文では、当協会が重点的に推進する普及・活用・体験学習の一環として、本年度に実施した体験学習の内容と課題について報告し、中川論文では30年にわたる滋賀県における保存処理を振り返り、現状と課題を整理している。

近年、埋蔵文化財をはじめ文化財に対する需要は多様化し、求められる成果のレベルも高くなってきていることを痛感する。このようなニーズに的確に応じていくためには、職員一人一人の資質の向上が不可欠であることはいうまでもない。埋蔵文化財のみならず、地域の文化財の多様な側面に切り込み、その価値を見出すとともに、それを広く理解していただけるように伝える能力が今まで以上に必要となっている。本紀要も、そうした能力・経験・知識の獲得と蓄積、情報の発信の手段の一つとして位置付けている。

掲載論考の内容は未だ十分なものとはいえないことは承知しているが、読者の皆様には温かいご意見・ご批判を重ねてお願いする所である。

編集担当（T-T）

紀 要 第24号 —設立40周年記念号—

刊行年月日：平成23年（2011年）3月31日

編集・発行：財団法人滋賀県文化財保護協会

520-2122 滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2

(tel) 077-548-9780 (fax) 077-543-1525 (e-mail) mail@shiga-bunkazai.jp

印刷・製本：三星商事印刷株式会社

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage

Vol.24 2011.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage